

連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の『上野遠江守～「早吸日女神社神領の代官」～』が掲載

●大分合同新聞朝刊 2019年1月5日(土)

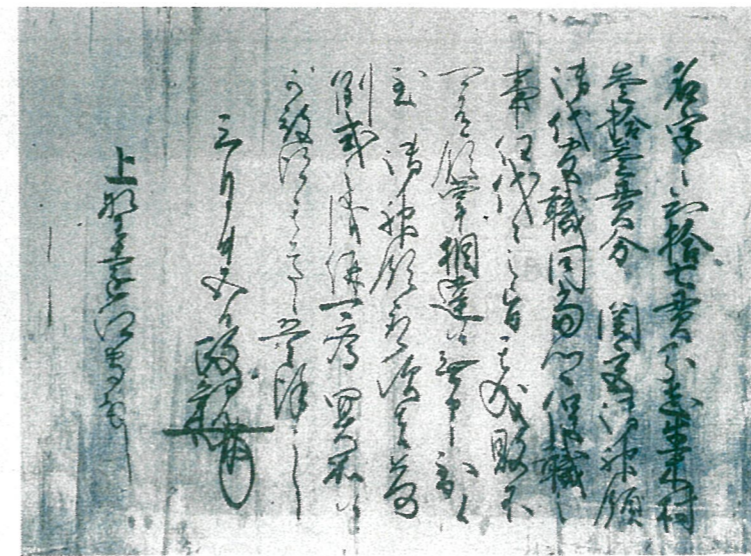
文化

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

海に囲まれた日本列島の 主従制組織に組み込まれ 各地には、古くから沿岸や 海上での生産活動を営む する者も少なくありません 「海民」による社会が形成 されていました。中世後期 になると、彼らの一部は、 領域支配を強め領国を拡大 した守護大名や戦国大名の

の港町だった佐賀関を本拠 とする水軍衆「上野氏」の 存在が明らかになってきた。ここでは、その上野 氏を巡る史料の状況と、佐 賀関での領主制の展開につ いて紹介しましょう。



上野遠江守に「関宮御神領御代官職」を認めた大友政親書状（下田文書）

上野遠江守

早吸日女神社神領の代官

の志生木村（大分市）と 「関宮御神領御代官職」 「当郷（佐賀郷）役職」の 成敗権をこれまで通り認め られたことが分かります。 この史料で上野氏が神領 代官職をもつ「関宮」とは、 古代の大室元（701）年 以来佐賀関に鎮座とされる 早吸日女神社のことです。 同社は、海岸線に沿って東 西に弓なりに港町を形成す る佐賀関上浦の東外れに鳥 居を構え、港町を見下ろす 高台斜面に社殿を展開する 鎮守です。海上安全祈願の 神として、地元民や港町を 訪れる人々のみならず、大 名大友氏からの崇敬も集め ています。

は、分散して伝わっていま す。一つは、26点の中世文 書と系図類で、名称を「下 田文書」として対馬の厳原 （長崎県対馬市）に移動し ています。一方、もう一つ のまじまりの「上野家文書」 は、3点の中世文書と写し、 氏に移動した時期は定かで はないものの、15世紀か ら16世紀半ばすぎの大友義 興の子孫に伝来してい ます。これらの文書群はい ずれも未翻刻で、特に前者 は所在を移動した上に名称 が変わり、後者は公開され ることがなかったため、こ れまで研究者の目に留まる ことがなかったようです。 「下田文書」中の写真の 古文書は、15世紀後半の守 護大名大友政親の書状で、 上野遠江守が政親から、本 貫地に加えて豊後国海岸部

（名古屋学院大学国際文 化学部教授）

毎月1回掲載